HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石垣, 佳奈子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13281号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72202
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kanako_Ishigaki_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：石垣　加奈子

主査　教授　後藤　康文
審査委員　副査　教授　冨田　康之
副査　教授　押野　武志

学位論文題名
三巻本『枕草子』の研究

〔当該研究領域における本論文の研究成果〕

本論文の本論を構成する全六章のうち、書き下ろしの第三章を除く計五章は、第一章（日本文学協会編「日本文学」64－3、2015）、第二章（物語研究会編「物語研究」17、2017）第四章（北海道大学国語国文学会編「国語国文研究」139、2011）、第五章（『古代中世文学論考』23、2009）、第六章（「物語研究」13、2013）と、いずれも既発表の学術論文等に基づいている。左記発表媒体のうち、「日本文学」は査読付き全国学会誌、「国語国文研究」は査読付き学会誌、「物語研究」は査読付き研究会誌である。以下、各章毎にその審査要旨を簡潔に記す。

第一章は、清少納言出仕前の逸話があたかも体験談のごとく臨場感を伴って語られる理由を、三巻本により強く認められるとする「一条天皇を取り巻く政治的不安要素」の払拭に求め、「めでたき天皇とその隣で后として輝く定子の物語の前史」を語る手法であることを述べるが、肝心な「政治的不安要素」に関する具体的記述が省略されるなど、やや恣意的読解との感を抱かしめる。本段は、まだ少年であった天皇と彼を見守る定子とが結託して実行した無邪気ないたずらを、『大和物語』を意識しつつ体験談風に描いてみせた話と解して十分ではないのだろうか。

第二章は、「説経の講師は」の段に見られる今昔の対比意識が、三巻本においてより強固であり、前後の章段配列の原理たりえていることなどを指摘する。しかし、三箇所の今昔対比記述のうち最初の一箇所は他と次元を異にするものとも考えられ、論の前提自体に疑問が残るために、今昔対比を切り口にして説かれる前後の章段配列の論理説明もいきおい強引な印象を与える結果に陥っている。さらに、前章につづく政治的な「対立をなかったもののように描く効果」云々に筆が及ぶに至っては、清少納言にはたしてそこまでの意図があったか否か、不明というほかないのである。

第三章では、「三月ばかり物忌しにとて」の段の「少将」を『落窪物語』の主人公道頼のこととする新説が提示されて興味深いが、かりにそうであるなら、「成信の中将は」の章段同様「落窪の少将」と記されるはずであり、この「少将」という本文には誤写を含めたより根源的な問題が存在するものと思われる。ここでも論の前提となる読みが不

確かであるため、以下において展開される論理も破綻の危機に瀕しているといわざるをえない。また、中宮定子の兄で早世した藤原道頼にまったく言及がない点にも不満が残る。

第四章は、巻末部三章段（二八七〜二八九）の「連続性と断絶性」の解明を試みた論。二八八段と二八九段の間に「断絶」を認める一方、二八六段から二八八段までを「清少納言が定子崩御後に宮中から去り、都から離れて、身内の歌を書き留めながら残りの人生を過ごす、といったひとつの〈物語〉を作り出すように機能している」と結論づけており、説得力のある見解として肯定できる。ただ、そうであるならばむしろ、「章段群」は「二八六段から二八八段まで」と捉えて論じた方がよかったのではなかろうか。

第五章は、「男は、女親亡くなりて男親一人ある」の段に描かれる「男」のモデルを『うつほ物語』の「忠こそ」であると提唱する新鮮な論であるが、「仲忠」ではなくなぜ「忠こそ」なのか、要所が十分に証明できていない。論中貴重な指摘も多いだけに惜しまれる。

第六章は、第三段「正月一日は」を三巻本『枕草子』の〈始まり〉、第二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」を〈終わり〉とみるもので、〈作者〉清少納言が立ち現れやがて宮中から姿を消して行く枠組みをそこに読み取る。魅力的な論ではあるものの、分析よりも観念の方が先走りをしているとの感を否めない。

以上を総合するに、三巻本『枕草子』の様々な「論理」を明らかにすべく数々の新見を鋭意生み出した努力は多としたいが、その結果には素直に従いかねる点も少なからず認められたと評価しなければならない。

〔学位授与に関する委員会の所見〕

上に述べたように、本論文には少なからぬ疑問点が含まれているが、そのことは、とりもなおさず三巻本『枕草子』研究の困難な現実を物語るものといえる。「雑纂本」の構成意識ないし論理を明快に説明することは、ことほどさようにたやすいことではないからである。こうした難題に独自の視点をもって果敢に挑戦した著者の姿勢は、それゆえ高く評価できるものであって、口述諮問を経て、今後より説得力豊かな実り多い成果を挙げていくであろう能力および意欲を有するものと確信されたため、本審査委員会では全員一致して、本論文が博士学位申請論文にふさわしいものと認めるに至った。